

Structures and Meanings of Adjectives in Chaucer's *Troilus and Criseyde*

チャウサーの『トロイルスとクリセイデ』における形容詞の構造と意味

(要旨)

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期人文学専攻

学生番号： D165542

氏名： 周 躍

本論文はチョーサーの『トロイルスとクリセイデ』（以下 *TC* と略称する）の形容詞を対象とし、その「構造」と「意味」を「統計」と「精読」の2つの方法で徹底的に分析したものである。主な目的は以下の2つである。1つは詩人の創作習慣や技法を探り、彼の言語芸術の一端を明らかにすることである。もう1つは、形容詞の持ち得る微妙な意味合いなどを究明することによって、作品解釈に新たな知見を提示することである。

本論文は、序章と、5つの章からなる本論、そして結論によって構成されている。「構造」と「意味」を完全に分離して論じることは困難であるため、全ての章において形容詞をこれらの2つの視点から論じる。また、より客観的かつ正確な結果を得るため、*TC*の全形容詞を含んだデータベースを作成し、「統計」に基づきながらも、その主な原典である *Il Filostrato*（以下 *Fil* と略称する）、ほかの中期英語の数十作品、またはチョーサーのほかの作品との比較を行った。さらに、代表的な形容詞をとりあげ、「精読」でそれらに含まれるチョーサーの意図を詳しく考察・分析した。

第1章では「構造」の中で最も目立ち、かつ様々な登場人物を修飾する「並列された形容詞」を中心に考察を行った。単に頻度から見ても、チョーサーは「並列された形容詞」を好んで使ったと推測される。このような用例の分析は彼の創作習慣の解明に重要な価値がある。この章では、チョーサーが形容詞を並列して使った目的を考察したほか、「並列した形容詞」を「話者」、「修飾対象」などの角度からも分析し、並列される頻度の高い形容詞を対象に、形容詞間の位置関係や意味関係についても論じた。さらに、*Fil*との比較で、チョーサーが原作から受けた影響、および翻案の際に施した独自の改変を中心に、その精妙さと芸術性も明らかにした。

続いて、第2章では主人公のトロイルスを修飾する形容詞について分析を行った。チョーサーの作品を全体的に見ると、騎士を主な登場人物としたものが多く、この章の冒頭では、そのような6作品を扱い、作品間の傾向やチョーサーの創作技術を論じた上、トロイルスをほかの騎士と比較し、彼を修飾する形容詞の特徴を考察した。続いて、トロイルスを修飾する形容詞のうち“wise”、“worthy”、“wo-bygon”の3つの代表的なものを詳しく分析し、それらが表した登場人物の意図、感情、また先行研究に言及されていなかったニュアンスなどを解明した。形容詞から見たトロイルスは、恋のもたらした楽しさより、悲しみが目立ち、彼の無為な性格もまた明らかであった。

第3章ではヒロインのクリセイデを修飾する形容詞を扱った。この章の主な目的は、

まずクリセイデの繊細な感情を分析すること、それから裏切り者の父を持った未亡人の彼女について、彼女自身、そして他の登場人物やナレーターが如何に見て考えたかを考察することである。本章では形容詞を「話者」ごとに分け、それぞれの全体的なデータを検討した上で、特徴的なものとして、“fresh”、“gay”および“lufsom”を詳しく考察した。形容詞から見た彼女は原典のヒロインより身分が高く、持っていた自信と自負が叔父パンダルス脅迫の前では恐怖となり、また運命の翻弄により悲しみと利己の心へと変化していた。

第4章ではもう2人の主な登場人物のパンダルスとディオメーデを修飾する形容詞を扱った。まず、3章と同じように、パンダルス修飾形容詞を「話者」と「話す相手」を基準に分類し、分析を行った。その中で取り上げた主な形容詞は“wylde”、“mad”、“confus”、“skillful”と“resonable”であった。これらの形容詞の分析で、登場人物の関係や、チョーサーが形容詞を選ぶ際の傾向など有意義な結論が得られた。またパンダルス修飾形容詞からは、話術が得意だが、言葉と行動が伴わないという彼の本質的な性格も見られた。この章の後半では、ディオメーデ修飾形容詞の考察を行った。ディオメーデ修飾形容詞は意味が曖昧で、特徴的である。その多くは肯定的な意味を持っているが、否定的な解釈も可能である。これらの形容詞の多くには Kennedy (2001: 11-12) が示したチョーサーの“conscious ambiguation”が窺える。本研究は作品の精読および原典調査で、チョーサーがディオメーデに対して否定的な態度を持っていることを明らかにし、曖昧な意味を持つ形容詞を否定的に解釈するのが合理的であると結論づけた。

最後に、第5章では自然と関係する形容詞に焦点を当てた。すべての形容詞は修飾対象別に分類され、詳しく分析された。この章ではチョーサーが形容詞に暗示など重要な情報を込めたということを再確認できた (“laurer-crowned”や floures “blew”がその例である)。また、登場人物の性格 (例えばトロイルスは頻りに神を罵るが、クリセイデはほとんどそうしなかったなど) をまた別の角度から見ることができ、全体的な人物像がより豊満になった。

このように、本論文は *TC* の形容詞を様々な角度から詳しく考察・分析し、多くの成果を得られた。